愛知県立大学看護学部紀要 Vol. 17, 41－45, 2011

■そ の 他■
（委員会報告）

# 平成21年度愛知県立看護大学卒業生による質問紙を用いたカリキュラム評価調査報告

平成21・22年度教務委員会

# Evaluation of the Curriculum of Aichi Prefectural College of Nursing & Health Using the Graduate Questionnaire in Fiscal 2009

Kyoumuiinkai

平成21年度愛知県立看護大学卒業生79名を対象に，本学部における教育カリキュラムの評価を目的として郵送による質問紙調査を実施し，24名（30.3%）から回答を得た．その結果，現在の看護に役立っていることは，「人間を総合的に捉え理解する」が21名（87.5%）で最も多く，「看護を国際社会レベルで考える」が５名（20.8%）で最少であった．現在の仕事における行動や考えでは，「わからないことを自主的に調べる」が21名（87.5%）で最も多く，「認定コースや大学院への進学を考える」が３名（12.5%）で最少であった．本学の教育がよいと思う内容としては，「患者の全体をとらえ寄り添うケアができる教育」「看護技術修得のための時間が多い」など，本学の教育方針に沿う記載が多数みられた．改善が必要と思う内容では，現場と教育とのギャップなどが指摘された．

キーワード：教育評価，カリキュラム，卒業生，愛知県立看護大学，質問紙

## はじめに

愛知県立看護大学看護学部では，科学的な根拠に基づく確かな知識，専門技術を修得し，高い実践能力と的確な判断力を養うとともに，高い倫理観を有し，主体的に行動できる人間性豊かな看護職を育成するために，教育課程を通して学生に修得させる能力を明確にして，体系的な教育カリキュラムを作成・実施している（平成19年度愛知県公立大学法人中期計画「1-1教育の成果」「第１」の７項④）．本学の教育の質の向上に向けては，既に毎年度授業評価が実施され，その結果および明確となった課題が翌年度の授業展開に反映されているところであるが，教育カリキュラムを総合的に評価するためには，看護実践の現場に立った卒業生が本学の教育を振り返ってどう感じているかを調査する必要がある．また，基礎教育と現場の乖離や新人看護師の職場適応の課題が指摘されるなか[1)-3)]，卒業後間もない卒業生の，教育目標に対応する到達度の自己評価を知ることは，基礎教育における学修を基盤にした卒業後の成長を知る一助となり，今後のカリキュラム改善を検討する資料となる．愛知県立看護大学は平成21年度より愛知県立大学と統合し，新カリキュラムがスタートしている．ここで平成20年度までの旧カリキュラムの評価を行うことは，これまでのカリキュラムの成果・課題を踏まえて今後のカリキュラム検討を行うために有用と考える．

そこで，平成21・22年度教務委員会では，愛知県立看護大学看護学部（以下，本学とする）カリキュラムの評価の一環として，平成21年度卒業生を対象に教育カリキュラム評価を目的とする質問紙調査を実施した．回答は24名（30.3%）と少なかったが，寄せられた意見は本学部のカリキュラム評価に活かす貴重なデータであることから，その結果を資料としてまとめ保存したいと考えた．

愛知県立大学看護学部

## Ⅰ．調査目的

専門職者として活動し始めた愛知県立看護大学卒業生が，卒業後約９カ月を経た新人の時期に，本学で受けた教育カリキュラムをどう評価しているかを明らかにする．

## Ⅱ．調査方法

### １．調査対象と方法

平成22年３月に愛知県立看護大学を卒業した卒業生79名に対し，郵送で無記名自記式質問紙を発送し，郵送で回収した．24名（30.3％）より回答が得られた．無効回答はなかった．

### ２．調査期間

平成22年11月～12月

### ３．調査内容

①対象の背景（所属施設の種類，職種），②本学で受けた教育（カリキュラム）が現在，看護の仕事を行うにあたってどの程度役立っているか（10項目），③現在，看護の仕事を行っている中での行動や考え（10項目），④本学部のカリキュラムについてよいと思うこと・改善が必要と思われること（自由記述）を質問した．②③は５段階（非常に当てはまる～全く当てはまらない）で回答を求めた．

各項目の設定は，本学の教育方針（理念，教育目標）と，先行研究[4]を参考にして作成した．

### ４．手順および倫理的配慮

平成22年３月に卒業が決定した４年生に対して調査目的と方法，調査への協力は現在および後日質問紙送付時の自由意思によることを文書および口頭で説明し，任意で調査用紙送付先住所の提出を依頼した．11月に質問紙を送付する際に改めて，調査の目的と方法，調査への協力は自由意思によること，調査は無記名で個人は特定されないこと，匿名性が保てない記載があるデータは抽象化するなどの処理をすること，調査結果は報告書にまとめるなどして公開することを文書により説明し依頼した．質問紙の返送をもって調査協力の同意とみなした．本調査は研究目的で行うものではないため，研究倫理審査委員会の審査対象とならなかったため，倫理的問題が生じないことを委員会において十分に審議して実施した．

### ５．集計方法

対象の背景と５段階回答については，単純集計し傾向を分析した．自由記述は内容の類似性をもとに整理した．

## Ⅲ．結　　果

### １．対象の背景（表１）

対象の背景は表１のとおりで，８割以上が病院・医院に所属する看護師であった．

### ２．本学の教育カリキュラムが現在の看護の仕事に役立っている程度（図１）

本学で受けた教育カリキュラムが，現在行っている看護の仕事において役立っていると感じるかについての結果を，「非常に当てはまる」「だいたい当てはまる」（以下，「当てはまる」とする）が多い順に図１に示した．

「当てはまる」が80％を上回った項目は，「人間を全体的・総合的に捉え理解する上で役立っている」21名（87.5％），「看護実践のための自己啓発，主体的な学習を続けていく上で役立っている」20名（83.3％），「対象の個別性に対応した看護を行う上で役立っている」20名（83.3％），「対象の生活の質を考慮した看護を行う上で役立っている」20名（83.3％）の４項目であった．

一方，30％に満たなかった項目は，「看護を国際社会レベルで考えていく上で役立っている」５名（20.8％）であった．

### ３．現在の看護の仕事における行動や考え（図２）

対象が現在行っている看護の仕事において，どのような行動をとったり考えたりしているかを「当てはまる」が多い順に，図２に示した．

表１　回答者の背景（n＝24）

| 項　目 | | 人数（％） |
|---|---|---|
| 現在の所属 | 病院・医院 | 20(83.3) |
| | 大学院・他大学など | 2( 8.3) |
| | その他 | 2( 8.3) |
| 職　種 | 看護師 | 21(87.5) |
| | 保健師 | 1( 4.2) |
| | 学生 | 1( 4.2) |
| | その他 | 1( 4.2) |

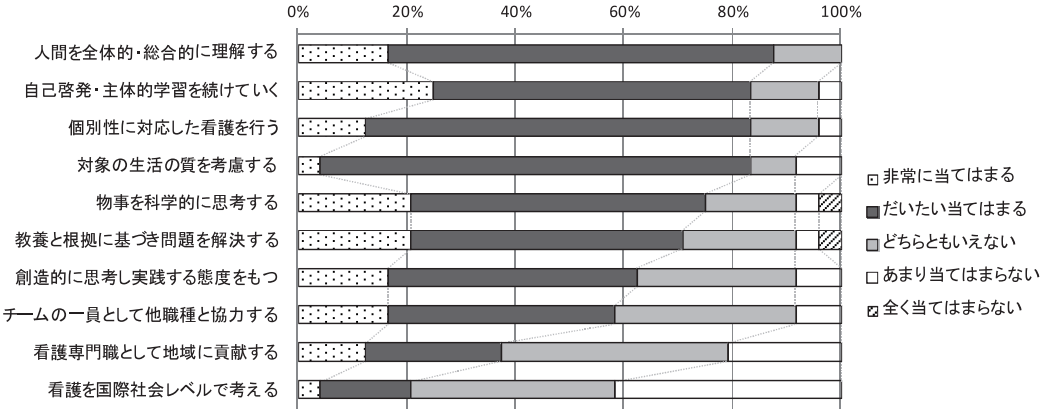


図１　本学のカリキュラムが役立っていること（n＝24）

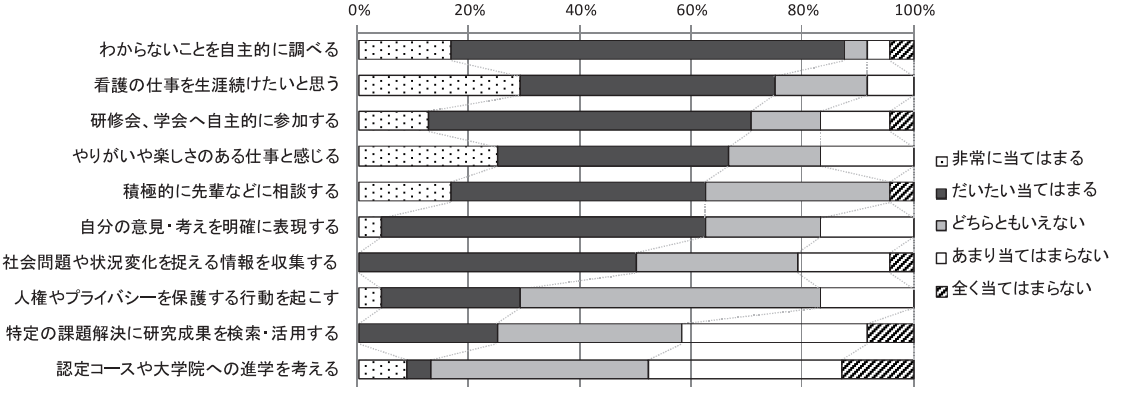


図２　現在の看護の仕事における行動や考え（n＝24）

「当てはまる」が80％を上回った項目は「わからないことについて自主的に調べている」21名（87.5％）であった．次いで，「所属や働き方はさておき看護の仕事を生涯続けていこうと思っている」18名（75.0％），「研修会，学会への自主的な参加をしている」17名（70.8％）であった．

一方，30％に満たなかった項目は「看護の専門性を高めるために認定コースや大学院への進学を考えている」３名（12.5％），「特定の看護実践課題の解決に向けた研究成果を検索し活用している」６名（25.0％），「看護の対象の人権やプライバシーが損なわれる，あるいは損なわれそうなときは何らかの行動を起こしている」７名（29.2％）であった．このような行動や考えに至らない理由について自由記述をみると（表２），「日々の業務で精一杯」や「余裕がない」などの意見が複数みられた．

### ４．本学のカリキュラムに関する意見（表３）

本学のカリキュラムについてよいと思うこと，改善が必要と思うこと（自由記述）を表３にまとめた．

よいと思うこととしては，「患者の全体をとらえ，寄り添うケアができるよう，教育されている」「幅広い教養を学ぶことができる」「多くの看護技術を実践する機会が多く与えられる・看護技術修得のための時間が多く設けられている」など，本学の教育方針として重視していることに対応する記載が多数みられた．

一方，改善が必要と思うこととしては，現場の実践にすぐに活かせないという指摘や，開講時期の要望などが寄せられた．

## Ⅳ．考　　察

平成21年度卒業生が愛知県立看護大学で受けた教育カリキュラムをどう評価しているかを調査した結果，「教育カリキュラムが現在の仕事に役立っていること」の回

表２　「看護の仕事における現在の行動や考え」の問いに「当てはまらない」と回答した理由

| 自由記述 |
|---|
| ・日々の業務で精一杯.（４名） |
| ・国際性や研究成果の活用，進学まで考える余裕がない.（２名） |
| ・研究を検索して活用しようと思う課題や状況に出会っていない.（２名） |
| ・やりがいのある仕事とは思うが，体力的にも精神的にも追い詰められ楽しいと感じられない.（２名） |
| ・所属科の特性から，実際の仕事は思い描いていた内容と異なり，やりがいや楽しさはあまり感じられない. |
| ・仕事に前向きに取り組むために，オフの時間を大切にしたい. |
| ・将来の人生設計を考えると（結婚，出産など）認定コースや大学院への進学はなかなか考えられない. |
| ・研究成果の検索システムにアクセスできる環境が身近にない. |
| ・自分の意見や考えを表現する必要性を理解しているが，新人という立場から，明確に表現する難しさを感じている. |
| ・国際レベルは，他大学の様な海外実習や授業がないと難しいのではないか. |

※「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」を選択した理由に関する自由記述をまとめた.

表３　本学のカリキュラムに関する意見

| | よいと思うこと | 改善が必要と思うこと |
|---|---|---|
| 教育理念・目標 | ・患者の全体をとらえ，寄り添うケアができるよう，教育されていると感じる<br>・自分で物事を考えるように指導してくださる<br>・論理的に考える，それを文章で表現することが訓練されているからできる | （該当する記述なし） |
| 教育内容 | ・看護管理学が学部教育にあり，集団で働く場合とても役立つ内容だった．これは本学部の素晴らしい特色<br>・アセスメントの方法，考え方をしっかり教えてもらえる<br>・幅広い教養を学ぶことができる<br>・情報処理の授業が仕事でとても役に立っている | ・現場の実際の忙しさ，患者と看護師のやり取りの実際に，教育とのギャップがある．実際の現場に適応できるよう，現状を知ることのできるカリキュラムがあると良い（２名）<br>・介護保険など社会福祉についてもっと学ぶ機会が欲しかった<br>・解剖，生理の知識がもっと必要<br>・臨床で実践できるように，看護技術演習を増やしてほしい<br>・国家試験対策・就職活動対策についても授業をして欲しい（２名）<br>・国際看護を４年生後期でなく，もっと早く学びたい<br>・疾患の講義とその疾患に関する看護の講義を，同じ時期に行ってほしい |
| 臨地実習 | ・多くの看護技術を実践する機会が多く与えられる，看護技術修得のための時間が多く設けられている（２名）<br>・実習が１年間にまとまっている．３週間ずつの実習は充実して学べた<br>・４年生の夏までで実習が終わるため，国試の勉強が充実してできる<br>・１年生から臨地実習を取り入れ，現場で患者と関わる機会を作っている | ・保健師の実習で，産業や学校分野のことも学びたかった<br>・看護技術で在学中に実習で経験できる項目が少ない<br>・１人の患者を受け持ち向き合うことは大事だが，現場ではスタッフ間，他職種間で協力する事が必須．実習でもチームで協働することを実践できると良い |
| 卒業研究 | ・看護研究を行う上で，卒業研究で得た知識は役立つ（２名）<br>・卒業研究の担当教員が多い<br>・アンケート集計にとても苦労したが，仕事に役立てることができてよかった | ・卒業研究は担当教員が決まるのが早い．特定の分野への興味や就職先を考慮する前に研究分野が決められるため途中で興味のある分野が変わったりモチベーションが上がらない |
| その他 | ・５年後，10年後の自分の姿として目指す看護師像をイメージできる目標とする先生たちがいる<br>・４年間という期間があるため，ゆっくり学ぶ時間があった | ・講義が分かりやすい先生と分かりにくい先生がいる<br>・仕事をやめなくても学業を続けられるような体制がほしい |

答から，対象の個別性や生活に根差した看護の理解や，専門職者として自己研鑽しようとする姿勢に役立っていることがわかった．看護の仕事における行動や考えの回答からも，自主的に調べたり研修会に参加したりするなどの積極的自律性が認められた．その一方で，地域貢献や国際レベルでの思考といった社会性の拡大については，一部の学生よりさらなる発展を希望する声もあり，今後の課題として検討する余地があると思われた．

また，「看護の仕事を生涯続けたいと思う」「やりがいや楽しさのある仕事と感じる」という項目に「非常に当てはまる」と回答した者が他項目より多かったことから，卒業後間もない時期であっても看護という専門職に魅力を見出して取り組んでいる姿がうかがえた．一方，「特定の課題解決に研究成果を検索・活用する」や「認定コースや大学院への進学を考える」については，「当てはまる」と回答した者が少なく，その理由に関する記述から目前

の業務に追われ，文献を検索したり計画的なキャリアアップに志向を傾けたりする余裕のない状況にある卒業生もみられることがわかった．これらの行動や考えは，業務や新しい生活に慣れてから表われるものかもしれない．

本学のカリキュラムについてよいと思うことでは，患者を全人的に捉え，論理的に思考したり記述したりする能力が養われること，一般教養科目や選択できる専門科目，および卒業研究を学修できたことが評価されていた．これらは大学教育の特長でもあり，本学で学んだことが卒業生の自信の一環となり得るものと思われる．一方で，改善が必要と思うこととして，看護学を大学で学ぶことの有用性を実感しつつも，専門基礎科目をより深く学ぶ機会の拡充や臨床ですぐに実践できる能力の養成を求める意見がみられた．本学では看護技術教育に力を入れて，看護学演習などの充実を図っているが，学生が実施し習得できる技術の種類やレベルには限界がある．今後のさらなる検討につなげていきたい．

本学は平成21年度より，愛知県立大学と統合し，新カリキュラムとなり，教養科目の学習などにおいて他学部との交流が充実し，看護専門科目においては，実践能力のさらなる育成をねらいとした講義・演習・実習を展開している．また，保健師助産師看護師学校養成所指定規則の変更に伴い，平成24年度にもカリキュラム改正を予定している．今後も，時機を逸することなく卒業生による教育カリキュラムの評価を継続し，社会が求める学士課程における看護基礎教育と本学独自の教育カリキュラムの向上に反映していく必要があると考える．

## Ⅴ．おわりに

平成21年度卒業生に対する調査から，愛知県立看護大学卒業生が本学で受けた教育カリキュラムをどのように評価しているかについて，その一部を明らかにした．本調査によって得られた結果を，今後のカリキュラム検討の資料としたい．

## 謝　辞

専門職にある新社会人として忙しい時期に本調査の実施にご協力くださった平成21年度卒業生の皆様に深く感謝申し上げます．

（平成21・22年度教務委員会．調査・報告担当：緒方京）

## 引用文献

1）日本看護協会：新人看護師の看護基本技術に関する実態調査．2002.

2）三宅由希子，青井聡美，安武繁：就職後早期の看護実践能力と現場で求められる能力の乖離　新人看護師と看護師長の認識の比較から．日本看護学会論文集：看護管理，39：161-163，2009.

3）福田敦子，花岡澄代，喜多淳子，津田紀子，村田恵子，矢田眞美子，中村美優，鶴田早苗，松浦正子，伊藤佳代子，古城門靖子：病院に就職した新卒看護職者のリアリティショックの検討　潜在構造の分析を通して．神戸大学医学部保健学科紀要，20：35-45，2005.

4）野田節子，雄西智恵美，石井美里，岩永秀子，岡部明子，荻野夏子，児玉千代子，佐々木哲二，佐藤節子，式守晴子，志水恵子，高橋奈津子：東海大学健康科学部看護学科におけるカリキュラム評価システムの構築―卒業生によるカリキュラム評価アンケートの作成―．東海大学健康科学部紀要，11：51-55，2006.